

ヒロとまりっぺの能登紀行

—— 能登連続殺人事件 ——

***速水茂夫ミステリーコレクション

(1)

海は怒ったように荒れていた。

いつもなら、その優雅な姿を見せつけている硫黄島も今は霧が深く空の色と同じ暗黒一色に塗りつぶされていた。

荒波は甲板を打ち砕き白い泡を踊らせていた。

トラック島からの打ち揚げ船、新氷川丸一万一千トンはそのような状況の中を一路、浦賀へ向かって突き進んでいた。

海外で終戦を迎えた日本人は当時六四〇万人程であった。

軍人、一般邦人がほぼ同数でアジア全域にその範囲は及んだ。

この海外からの引き揚げは終戦後から五年間にその大部分を終えたが途中一時の空白期を是らんで三十四年頃まで続いた。

各地とも軍人の復員は比較的順調に行なわれたが、組織をもたない一般邦人にとって引き揚げは長い苦難の道程であった。そのほとんどが着のみ着のまま祖国にたどりつかなければならなかった。

略奪、暴行、射殺、異国の丘での抑留生活——

いずれにしても引き揚げは戦争のもたらしたもう一つの悲劇だったのだ。

新氷川丸では大半は船室にこもっていたが何組かのグループが甲板ではしゃぎ廻っていた。

「おら、生きて国さ帰れると思つてもみなかつたつす。もうすぐ子供つちらの顔が見えると思つとドキドキして船室で寝てなんかいらねえつす。」

「んだ」

三日月のようにあこの突き出た男が相づちをうった。

「すかす、アメリカさんの奴隷になつて、これからどうなるか分からねえぜ」

横から猪首の男が口をはさんだ。どうやら彼らは東北の出身らしい。

別のグループの男が口をはさんできた。

「心配するこたないじ。アメリカさんは意外とジエントルマンだと噂があるじ」

「何か聞きづらいなつす。お宅らどこの出だ？」

猪首が笑いながら聞き返した。横で三日月あこの男からも白い歯がこぼれていた。

「あんたらだつてズースー弁は聞きづらいわ。よーいうわ。我々は能登の出身だじ」

長身でギョロ目の男が得意そうに胸をはって言った。その時、大波の衝撃で大きく船が揺れてその男がずつこけそうになった。その姿にどつと笑い声が起こつた。

「お宅ら、のん気そうに笑つとるけど…。本当に我々はこれから先どうなるぞら？」
相撲取りのような大柄な男が二つのグループにヌツと顔をつき出した。柄に似合わず気が弱そうな感じである。

「心配すんなつて。少なくとも人間同志の殺し合いはもう終わったんだつす。それだけでも気がぐんと楽になつちやうもんや」

そう言つて三日月あごはカラカラと大声で笑つた。

「そう考えりやそうずら。殺し合いするよりもまだアメリカさんにつかわれた方がいいら」

「そうそう。そのとおりつす。所でお宅らどこなの？」

「うちらは伊豆から来た」

相撲取り風はそう言つて後ろの仲間二人に目を配つた。

能登グループの四人が軽く会釈をした。

長身のギョロ目が相撲取り風の男に目を細めながら、

「伊豆はよう温泉が出ると有名だじ。今度、案内してもらおうかな？」

相撲取り風が白い歯を見せながら、

「よっしゃ。案内するぜ」

そう言つてから横でニヤニヤしているタラコ口の男の方をチラッと見やつて、

「こいつの実家が土肥で旅館を経営しとる。今から仲良くしておくと便利だぜ」

「そうか、そうか。タロイモにパンノキの実はもう食いあきたじ。その時はホツカホツカの特上の銀シャリを頼むぜ！」

ギョロ目が差し出した手をタラコ口がしっかりと握りかえた。

「それより、あれ見ろよ」

ギョロ目が、バケツを取り出して体を洗っている男を指差した。

その男はひよろつとやせていて角ばった体付きだった。

甲板の隅つこの方で一人ぼつんと体をシャボンで洗っていた。まるで角材が雨に打たれているように見えた。

「あの『タヌキ』を中尉殿と呼ぶのももう終わりだじ」

「そうだな。それだけでも俺は幸わせだじ」

『タヌキ』は彼らの上官のニックネームらしい。

「あいつにはずいぶんこっぴどく扱われたからな」

ギョロ目が吐き出すように言いながら三日月あごの方を横目で見た。

「うわさに聞く『タヌキの中尉』とはあの男なんですか？」

「ウン。ほらこの通りさ。まだ半分ブラブラしているだろ」

ギョロ目はそう言つて右の耳に手をあてた。

「耳がどうかしたんですか？」

相撲取り風が口をはさんだ。

「現地人からもらったパンノキの実を俺に内緒で食ったって、いきなりナイフで切りつけられたんだ。もう少しで耳を剃り落とされる所だったじ」

「ひでえことすんにゃあ」

「そんなのは序の口だし。俺の体を見てくれ」

今迄黙っていた卵型の顔の男が軍服を脱いで上半身をさらけだした。肩の下方の部分がざくろのようにえぐられている。

「タヌキにやられたんだよ」

「……」

三日月アゴが何でと理由を目で問うている。

「うっかり間違つてタヌキの実家から届いた手紙を開いてしまったじ」

「それでそんな……」と呟くように言つて三日月アゴはあきれて口をポカンと大きく開いた。

「あれは人間じゃないじ。畜生だし。いや畜生以下だし。それで自分の上官には年中、ゴマばっかすっているんだからな」

「クソッ。あの野郎」

ギョロ目がツバをベツと吐いた。

その時、上空を鮮烈な光が大きく二つに裂いた。稲光りである。

「おっかにやー」

柄に全く似合わず相撲取り風の男が甲板の階段を大声を出しながら降りて行った。

再び稲光りがして大粒の雨が落ちてきた。

雨はバシヤバシヤと甲板を叩きつけた。

続々と男達が船室へ駆け込んで行った。

その時、一つの「影」が甲板から黒い海に向かって放り込まれた。

荒れ狂う海はパツクリとその「影」を飲み込んだ。――

昭和二十一年、初冬の事であった。

(2)

時代は平成。

東京ドーム。

「三番ーん。ライト松井」

場内アナウンサーの声に一齐にウェイブが起こっていた。

松井はデビュー当時ライトを守っていた。

九回裏、対ヤクルト。スコアは一对一の同点。ランナー、サードに川相。

松井がバッテリーボックスに立つ。

すさまじい喚声と共にウェイブの嵐が更に強まってくる。

郡司博臣ぐんじひろおみも横目で波を確認してから両手を上げて立ち上がった。

その時、左隣りの女性の手が彼の帽子に触れた。帽子はヒラヒラと蝶が舞うように飛んでいった。
「あつ！ すみません」

Tシャツに赤いジーパン姿のその女性は郡司に一べつして軽く頭を下げて帽子の行方を追って行った。

「ワンストライク」アンパイアーの声。

岡林のストレートが外角いっぱいに決まった。松井のバットは空をきっていた。

アンパイアーの両手が宙に踊った。タイムのサインであった。

岡林が啞然とした表情で外野方向を見ている。

ベージュの帽子がグリーンの上に落ちてきた。長身の男が転がるようにグラウンド内へ飛び降りて来てサツと帽子を拾った。とんだハプニングに場内が大きくざわめいた。

再び、アンパイアーのプレーのサインと共に岡林が大きくふりかぶった。

カシーンという快音と共に松井の打った白球はライトスタンドへ突き刺さった。

「ワー」「キヤー」

場内、割れんばかりの大喚声である。

スコアボードに新しく「3」と数字が表示された。松井のサヨナラ逆点ホームランであった。場内の喚声はしばらくおさまりそうになかった。

長身の浅黒い顔をした男が周囲をキョロキョロ見わたしながら、

「お宅のですか？」と言いながら帽子を郡司へ差し出した。

「どうもすみません」

郡司と赤いジーパンの女性が同時に礼を言った。長身の男は二人にニコツと笑みを投げてすぐに立ち去って行った。

「本当に申し訳ございませんでした」

ジーパンの女性がサングラスをはずして郡司にふかふかと頭を下げた。

「いいんですよ、そんなこと」と言つて郡司は白い歯を見せてにっこりと笑った。

「あなたもジャイアンツファンですか？」

「はい。大ファンなんです。特に松井選手の。つい興奮して大きく両手を広げてしまつて……。

本当にご迷惑かけてすみません」

「松井の活躍がますます楽しみですね」

「ええ。わたしもこうして暇さえあれば応援に来ているんです。」

「そうですか。そうですか。」

「はい。あ、はじめまして。わたし木村まり子と申します」

「失礼しました。わたしは郡司と申します」

郡司がサマーブレザーから名刺を取り出してまり子に軽く頭を下げながら手渡した。

名刺には報道写真家と肩書があった。まり子はまじまじと名刺を見てからハンドバッグへしま
いこんだ。

郡司が泥まみれになった帽子をパンパンと叩きながら、

「じゃ、ゲームも終わったことだしこらで退散しようかな」と半分、独り言を言うように言った。
「郡司さん。その帽子わたしに譲って下さい」

まり子の突然の言葉に郡司は思わず目をしばたいた。周りを見るとほとんどの客は帰ってお
り、郡司とまり子の二人だけがそこにとり残されたようにポツンと浮いている。

「ええ。だってそんなに汚してしまったのですもの。わたし新しい帽子、弁償致します」

「なあんだ。そんなことですか。いいんですよ気にしないで下さい」と言つて郡司はハハハと
声を立てて笑つた。

帽子はよく見ると確かに泥だらけであった。

「いえ、わたしの気が済みません。幸い神田でわたしの友人が帽子屋の店長をやっていますので、
ね、お願いします。ちょっと立ち寄らせて下さい。せっかく大ファンの松井がさよならホームラ
ンを打ってジャイアンツが勝つてもこのままでは楽しくないです。」

郡司はまり子に押し切られたかっこうになってとりあえず二人で球場を出た。

「大変おそくなりまして」

まり子はハンドバッグから名刺を差し出しながら、

「今はフリーターでファーストフードの店でアルバイトをやっていますが、その前はわたし雑誌の記者でしたの」

名刺には名前と電話番号だけが載っていた。その名前の横に彼女のイラストがかわいらしくちよこんとついていた。卵形の顔に大きなクリクリした目、やや大きな唇、シヨートヘア。よく彼女の特徴をとらえていた。

郡司は思わずほくそえんだ。

「これ以上断わると逆にあなたから印象を悪くされてしまいそうなので今回はあなたのお言葉にあまえさせてもらうことにしましょう」

「ええ、是非」

郡司は三十八才であるがまだ独身である。ムンと蒸し暑いアパートへこのまま帰るよりもかわいこちゃんデートも悪くないなと思ってみたりしていた。

「お店は神田つておっしゃいましたね。私、車で来ていますので宜しかったら私の車で参りましょうか？」そう言いながら郡司はネオンサインのチカチカしているパーキングを指差した。

まり子はにっこりと肯いた。

パーキングから出てきた郡司のオレンジ色の車を見てまり子は、

「まあ、かわいい、これミニ？」と言ってから首をかしげ、

「ミニよりもちよつと大きなかんじね。似ているけど」

郡司がドアを開けながら、

「バンデンですよ」

まり子が助手席に乗り込んだ。

「バンダイ？ あのオモチャ屋さんが車作っているの？」

郡司は大きな声で笑いながら、

「まさか、違いますよ。バンダイじゃなくバンデン。正式にはバンデンプラスプリンセスって
いうんです」

「まあ、素敵な名前。外車ね。だけどハンドルは右なの？」

「イギリスの車です。昔、王室で愛用されていた関係もあってこんな名前が付いたと聞いてい
ます。バンデンプラスプリンセス、ね、ひびきがいいでしょ」

「本当に素敵ね。ということはその助手席に乗っているわたしはさしずめイギリスの王女様と
いった所かしら」

まり子の白い歯がこぼれていた。

車は静かに神田方向へすべり出した。

帽子屋で郡司はまり子からジャイアントカラーのオレンジ色のハンチングをプレゼントされた。

よほどまり子はジャイアンツファンなのであろう。子供っぽい感じであったが郡司は苦笑しながらかぶってみせた。

髪を分度器で計ったようにピシッと七、三に分けた男子店員が、

「なかなかお似合いですよ」とそばから言った。

面長の顔。男っぽい太い眉にやや切れ長の目。郡司にはサングラスや帽子もよく似合う。

まり子もいくつかの帽子をかぶって鏡をながめたりしていたが気に入ったものがないらしい。

二人は店を出た。

「ご自宅までお送りしますよ」

郡司がハンドルを握りながら言った。

「あら、すみません。何か悪いみたい」と遠慮がちにまり子。

「どちらにお住まいなのですか？」

「わたしは赤羽です」

「そうですか。じゃ……。」

郡司がバンデンのアクセルをグイと踏み込んだ。彼はまり子をこれから食事にも誘いたかったが言いそびれてしまった。

「報道写真家っていうと日本全国飛び廻っているんでしょ？」

「ええ。仕事柄、カメラ片手にどこにでも行きますよ。前はM新聞の社会部に勤めていたんで

「すが五年前に独立したんです」

「そうですね。お偉いわ」

「なーに、そんなたいしたもんじゃありません。仕事っていえば今は写真週刊誌の仲間の後を金魚のフンみたいにくつつきまわっているようなものですよ」そう言って郡司はハハハと声を立てて笑った。

明治通りへさしかかると雨が落ちてきた。遠くで稲光りが見えた。明治通りは混んでいた。

「木村さんも先程、雑誌の記者をやっていたとかいっていましたが……」

「ええ。ブティックに勤めていた時、スカウトされてファッション関係の雑誌の記者を半年程やりました。その後、関連会社へ廻され一年程『女性芸能実話』の記者をやりました」

「ああ、あの雑誌ね。良く売れてますよね」

「仕事はハードだけど楽しかった。だけど自分の時間が無くなっちゃうんでやめたんです」

「そうですね。私と同じようなことやっていたんですね」

渋滞はますますひどくなってきた。雨も次第に強くなっていた。二人の会話を遮るように車の屋根をしきりに雨が叩いている。

郡司は計器盤を見てチツと舌打ちをした。水温計の針が赤いラインに接近してきていたのだ。ボンネットから蒸気かもやのように立ち込めてきた。強い雨にカムフラージュされてまり子は気がついていない様子である。